第 2016-25 号

恵みと真理のニュース

2016 年 6 月の三次　恵みと真理教会
韓国 京畿道 安養市 萬安区 安養路 193 / ☎82-31-443-3731 / www.gntc.net

［証］

変らない愛で私を強く支えてくださった神様を賛美し、私に支える手本を見せてくださった区域長にも感謝します

私は1996年秋に当時付き合った旦那に導かれ教会に来て決信しました。今まで 本棚の片隅に蔵していた聖書を始めて開いてみました。そして、当会長牧師の説教を聴き礼拝で理由もなく涙を流しました。
神様がイエスキリストの中で私達に与えて下さる恵と愛について全く知らない時でした。私の婚家は恵と真理教会へ熱心に教会を支える篤実な信仰の家庭でした。神様が私のため福ある家庭を予備して導いてくださったのを時間が過ぎて悟られ、神様に感謝しました。
初めの子が1歳になるまで隣りに住む区域長が私の家に来て私のため根気良く区域礼拝を導いてくださいました。その時はありがたいを知らなかったですが、年月が経て私も執事になり、区域長になってから魂を熱く愛する心と私のため祈ってくださった区域長の愛を悟ってから感謝しました。
その前、旦那の職場の近くに引越しした後、教会に通うのを負担に思うようになりました。子供を育てるのが大変で教会まで距離も離れていて朝早くから教会に行く準備をするのが容易ではなかったです。
　そして、教会に行くと旦那は特別な職分もなくても奉仕したから私と二人の息子は父を待つのがつまらなかったです。それで、旦那は教会で奉仕をして子供達と私は先に家に帰って来ましたが、その時は心がとても不便でした。 恥ずかしい心で魂の救いの喜びと感激を享受しなくても区域礼拝には熱心に参席しました。二人の息子を連れて礼拝に行くのが容易ではなかったですが、聖徒になった以上、熱心にするのが当たり前だと思って参席しました。 教会の礼拝と区域礼拝で聖徒達が教会の建築のため祈りして熱心に献身しました。そして、神様の恵みでカンジュ聖殿が建てられました。教会が近くなって教会に行く足取りもいっそう軽くなりました。
　礼拝だけ捧げた私に伝道士が奉仕するように勧めました。以前は教会が遠いといういいわけをしましたが、神様が新しく聖殿を建ててくださり言い訳もなく断ることができませんでした。そして、旦那が以前から私に願っていたことだったので“はい、わかりました。”と答えました。つきの主日からすぐ奉仕の服を着て礼拝案内をする奉仕から始めました。
ところが二人の子供達が幼稚園に通い私も職場に通い始めて、一回二回区域礼拝を休んで主日礼拝も疎かにしました。その時、おろかでした世の問題で苦労して主と教会とますます遠ざかっていました。その頃、教区伝道士が新しく赴任して来たから私の家に訪問すると連絡が来ました。しかし、負担になって職場の事があると言い訳をして断りました。
教会と遠くなって人生の重さでひじけられ心が疲れて行くある日、伝道士から連絡が来ました。“今回は会いたいです。遅い時間でも良いです。”という伝道士の関心に感動され約束をしました。
　約束した時間に来た伝道士は人の魂が救われ主を支えて生きるのがどれほど福なのか強調して話し、私の信仰が成長して主の中で生きて喜ぶように祈ってくださいました。その週間に初めて平日礼拝に参席しました。再び教会に行って賛美し神様の御言葉を聞き心が明らかになるのを感じてまた呼んでくださった神様を感謝します。
熱心に礼拝中心の生活をしながら旦那と共に署理執事の職分を受けました。その中で大きい子供が小学校に入学を控えて学校も近くて教会も近い所に引越ししたい希望がありました。私達の夫婦は神様の助けを求めながら祈って教区と区域にも祈り課題を話して願いました。私はもっと熱心に礼拝し仕える生活をするため通っていた職場も止めました。神様の助けと摂理で祈りに答えて下さいました。私の願っていた家に引越ししました。神様の恵みでした。
その後から私は主日と平日の礼拝、区域礼拝、祈り会の全ての礼拝に積極的に参与しました。そして日々信仰が成長し主と共に生きる喜びも知るようになりました。以前には感じられなかった心霊な喜びと平安を感じるようになりました。礼拝を捧げ牧師の説教を聞くたびに神様は信仰の上に信仰と恵を与えてくださいました。大胆に神様に祈ったら答えられる体験の喜びも享受するようになりました。
主の体になる教会のため奉仕することにもやりがいを得て楽しさと神様は私に区域長の職分も与えて教会学校の総務で立てくださいました。全てが足りない私には担えるのが負担でしたが感謝する心で受けて忠誠し神様は知恵と権能をくださるのを信じて従順しました。
区域長の職務をしながら体が麻痺され体が不便な聖徒を支える中で神様はむしろわたしに恵みと感動を与えてくださいました。また、幼稚部と児童達と共に神様の御言葉を読み賛美する時にまるで天国にいるような感じでした。子供のようにならないと天国に入らないとおしゃった神様は私に子供達と共に主の愛と恵を分かち合う尊いタレントをくださいました。
幼年期に夏の聖書学校の恵を分かち合わなかった私に神様は先生達と共に夏の聖書学校を準備しながら神様に栄光を捧げる恵を与えてくださいました。これと共に人生の中で大きい福も与えてくださいました。
最後まで助けてくださった神様の愛と救いの恵に感謝します。担えられない苦難と試験がある時に私のため十字架をかけた主の御言葉と聖霊で大きい慰めを与えて下さり、新しい力をくださって克服するように導いてくださった神様に感謝します。教会学校の中高等部の教師で新しく愛と献身の機会を与えてくださり以前よりもっと主の御言葉を愛するように主の御心を知りたい心と熱心さをくださった主を賛美します。神様が私を愛し教会を通してくださった全ての職分を良く担え光と塩で主の前に立つ日に主から褒められるのを希望して神様に感謝の祈りを捧げます。ハレルヤ！

［信仰コラム］

鏡と警戒になる事事

”これらの事が彼らに起ったのは、他に対する警告としてであって、それが書かれたのは、世の終りに臨んでいるわたしたちに対する訓戒のためである。”（コリントの信徒への手紙１０：１１）

ローマ書 15 章の 4 節に”これまでに書かれた事がらは、すべてわたしたちの教のために書かれたのであって”と記録されています。広野を行進したイスラエル民達に起こった事件は広野のような世を生きていく聖徒達に特に貴重な教訓を与えます。その事件の中で共通的な確信を整理して私達が鏡と警戒として扱うべきのことを調べてみましょう。
第一は、神様の品性と言約を疑ってはなりません。
聖書で指摘する疑いとは神様の品性と神様の言約に対することであります。神様は全知全能であり無所不在で永遠であります。正しくて善良であり、慈愛に満ちていて真実であります。どんな状況であっても変わらない神様の品性を信じて頼ったら結局、神様が神様の光栄を見せてくださいます。そして、私達に与えてくださった神様の約束を疑ってはなりません。神様の民達が敗北の苦杯を喫した最も大きい原因の中で一つが神様に対する疑いでした。疑いを処理できないと不信を生み、不信が大きくなると逆らいを生んでしまいます。
第二は、貪欲を捨てるべきです。
たくさんのことを所有しようとすることが貪欲ではありません。カナンに定着したイスラエル民に神様が”あなたの口を広くあけよ、わたしはそれを満たそう”と言われました。しかし、彼らは心がかたくなり聞かず、その心がかたい通りに神様が捨てて彼らの思うままに行うようなさいました。なので、大きく求めるのが貪欲な心ではないということを知ることができます。貪欲とは神様の許しを考慮せずに自分の願い通りに獲得しようとする欲心を意味します。
第三は、神様に恨んではなりません。
イスラエル子孫達は広野生活をしながらも神様に向いて数多く恨みと不評をしました。指導者モーセに向いても恨みました。勿論、コラとダタン、アビラムのように変質して神様の思いを逆らって行う指導者に従うと彼らと共に滅びます。しかし、モーセは神様の前で忠実な僕であったのでモーセに対する恨みと不評は神様に対する恨みと不評にみなされました。
イスラエル民達は食べられる物が何もない広野で神様が与えてくださる養殖であるマナを毎日食べました。マナを与えてくださる神様が必要ならば肉も与えてくださることができるということは分かりきった道理であります。それなのに、彼らは感謝で求める代わりに恨みと不評をしました。貪欲を続いて抱いていると恨むようになり、恨みは懲罰をもたらします。
第四は、誘いと試しを警戒して退けるべきです。
まず、神様と偶像を共に仕えようとする誘いを退けるべきです。イスラエルの民達はシナイ山に登ったモーセが帰らないので金の子牛偶像を造り、その前でエホバの名を呼びながら座して食い飲みをして立って戯れました。その事件によって神様の怒りを買い大勢が殺されました。また、他の宗教の行事に加わるようにする誘いを退けるべきです。イスラエルの民達はモアブ王の計略に引っ掛かり異なる神々の祭祀に参加してバアルに拝しました。なので、神様が怒りました。私達がこのような誘惑に対して明白で断固として処するべきです。
第五は、救われた恵みを忘却してはなりません。
イスラエルの民達がエジプトに住む時の惨憺（さんたん）な奴隷生活から神様の能力で救われた恵みを考えてみると現実の困難のため不評して恨むことは軽挙妄動な行動であります。私達は罪悪に縛られサタンの奴隷であり、結局はサタンと共に永遠の火に遂げ込まれる運命に処された者でした。しかし、神様の大きい恵みを受けて救われた民になり、天国に向いて進むようになりました。私達はこれを常に想起しながら一生涯救われた恵みに対する感激を持ちながら生きていくべきであります。
エジプトから出たイスラエルの民の中で多数は広野で滅びられました。彼らの始めは良かったが結末が悪いでした。皆さんは、イスラエルの民達が経験した事事を鏡と警戒に扱って始めと結末が全て良い聖徒になってください。

「チョヨンモク牧師先生の信仰コラム‘緑の牧場、清い川’本の語り中」

持続しなければならない神秘体験

恵みと真理教会 **チョヨンモク** 牧師

理論と認識を超越する不思議なことを示して神秘と言います。 聖書には神秘な話が一杯です。神秘が排除された信仰は信仰だと言えないです。クリスチャンは神秘体験がますます累積する生活をするようになります。 今日はクリスチャンに必ずなければならないし持続しなければならない神秘体験に対してよく見ようと思います。それはイエス様を自分の救い主で信じて迎接することと相変わらずイエス様を信じて愛するのが二つです。

第一は、イエス様を自分の救い主で信じて迎接する神秘体験に対してよく見ます。

イエスキリストを信じる皆さんの中には易しく信じた方々がいて、非常に大変に信じた方々がいるでしょう。 どの場合でもイエスキリストを信じる人はすごい神秘体験するようになったのです。 イエス様を自分の救い主で信じて迎接したのが神秘体験に属する理由はこの事が神様の恵みによるからです。 イエス様がおっしゃるのを “わたしをつかわされた父が引きよせて下さらなければ、だれもわたしに来ることはできない。わたしは、その人々を終りの日によみがえらせるであろう。”（ヨハネによる福音書 6:44）としました。 イエス様を救世主で信じることは神様の恵みをこうむらなければなりません。 イエス様を信じることは神様の絶対主権と選択によったのです。 このような事実が エペソ人への手紙，１章 3節から 6節までこんなに記録されました。 “ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神。神はキリストにあって、天上で霊のもろもろの祝福をもって、わたしたちを祝福し、
みまえにきよく傷のない者となるようにと、天地の造られる前から、キリストにあってわたしたちを選び、わたしたちに、イエス・キリストによって神の子たる身分を授けるようにと、御旨のよしとするところに従い、愛のうちにあらかじめ定めて下さったのである。これは、その愛する御子によって賜わった栄光ある恵みを、わたしたちがほめたたえるためである。” だから見ることもできなかったイエス様を自分の救い主で信じて迎接することは尋常な事ではないです。 正確に言わば信じるのではなく信じられることであると言えます。 だから驚くべきな神秘です。 イエス様を救い主で信じる人々はまことに奇妙な神秘を体験しているのです。

二番目は、相変わらずイエス様を信じて愛する神秘体験に対してよく見ます。

イエス様が自分は天から下ったパンだとおっしゃったのに対してユダヤ人がひそひそと話しながらざわめき始めました。 その理由は彼らがイエス様の親と兄弟が誰なのかをすべて分かっているのに、イエス様が天から下ったと言ったら到底に受け入れることができなかったのです。
もし彼らがメシアに対して聖書に記録された予言者の予言をまともに分かっていたら少しも変に思うことがなかったはずです。 しかし彼らは予言者を通じて予言なさった神様のお言葉を正しく学ぶことができなかったです。 聖書に啓示されたそのまま学んで分かるようになったらイエス様がメシアというのを信じてイエス様を救世主に迎接したはずです。
イエス様が付衍しておっしゃるのを “わたしは命のパンである。あなたがたの先祖は荒野でマナを食べたが、死んでしまった。 しかし、天から下ってきたパンを食べる人は、決して死ぬことはない。わたしは天から下ってきた生きたパンである。それを食べる者は、いつまでも生きるであろう。わたしが与えるパンは、世の命のために与えるわたしの肉である」。そこで、ユダヤ人らが互に論じて言った、 イエス様の肉を食べて血を飲むという話はイエスキリストを信じてイエス様と連衡するのを意味します「この人はどうして、自分の肉をわたしたちに与えて食べさせることができようか」。イエスは彼らに言われた、「よくよく言っておく。人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない。 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には、永遠の命があり、わたしはその人を終りの日によみがえらせるであろう。わたしの肉はまことの食物、わたしの血はまことの飲み物である。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者はわたしにおり、わたしもまたその人におる。生ける父がわたしをつかわされ、また、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者もわたしによって生きるであろう。天から下ってきたパンは、先祖たちが食べたが死んでしまったようなものではない。このパンを食べる者は、いつまでも生きるであろう」。” とイエス様がおっしゃったら “「これは、ひどい言葉だ。だれがそんなことを聞いておられようか」。” と露骨的な拒絶反応を見せました。 イエス様が彼らに “しかしイエスは、弟子たちがそのことでつぶやいているのを見破って、彼らに言われた、「このことがあなたがたのつまずきになるのか。それでは、もし人の子が前にいた所に上るのを見たら、どうなるのか。” としました。 このようなイエス様のお言葉をきいて付いていった多くの人々がイエス様を離れ去りました。
イエス様が１２弟子に “君達も行こうとするのか?” なさったらシモンペテロが答えるのを “神様、永生のお言葉があるのに私たちが誰に行きますか?” としました。 ペテロの返事はイエス様を信じる根本理由と関わっています。イエス様を信じる根本理由が救いを得るためのことではなければなりません。 他に言えば永生を得るためのことで天国に入るためのことではなければなりません。 イエス様が公生涯を始めながら叫んだお言葉は “悔い改めなさい天国が身近に来た。” です。 イエス様 は天国福音を伝えたと聖書に記録されました。 福音は天国福音です。 天国を言わない福音は福音ではないです。 世の中には多くの宗教があって教えがあるがそれは天国福音ではないです。天国福音はイエスキリストによって宣布される福音です。 あがないの死を死んで墓から復活したイエスキリストだけが私たちに永生と天国を与えるのです。
聖書は死の以後の生と家所に関して真の知識を提供してくれます。 旧約の予言者と新約の使徒が聖霊に感動されてきいて見た天国と地獄の実際が聖書の多くの所に記録されています。それだけではなくイエスキリストが親しく天国と地獄に関しておっしゃいました。 死の次の生と家所に関する真の知識は聖書を通じてだけ分かります。 死後世界に対する体験談を言う人々は過去にもあったし今もあります。
このような個人的な神秘体験を聖書の記録のように受け入れるとか信じてはいけないです。死後世界については聖書に啓示されたお言葉の中で知識と信仰を持つようにしなければなりません。 天国を見られなくても聖書に記録されたから信じる聖徒が幸せがあります。 天国と地獄は想像の中の世界や非実在な幻想の世界ではなく実在する家所です。 天国が北極星の越えてある向こうの北にあってもあるいはこの広闊な宇宙のどの所にあっても、私たちが思う宇宙と違う次元にあってもそれが重要ではないです。 重要なことは主イエス様が予備なさった栄えて燦爛たる天国が実際に存在するという事実です。 天国は実在する家所であるのみならずこの世の中で私たちが経験するどんな家所や状態では比べることができない美しくて楽しくて満足な所です。
それではこのような天国は誰が作ったか? という質問が生じます。 イエスキリストがおっしゃるのを “「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には、すまいがたくさんある。もしなかったならば、わたしはそう言っておいたであろう。あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。そして、行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである。”（ヨハネによる福音書 14:1～3）としました。 イエス様の弟子になろうと熱心に従った多くの人々がイエス様が自分たちが思って望むこととは違いおっしゃってこれを信じなさいと言ったら拒否感を表示してイエス様を立ち去りました。 しかしイエス様が１２弟子に “君達も行こうとするのか?” なさるとペテロが “神様、永生のお言葉のあるのに私たちが誰に行きますか?” としました。 永生を得るため、天国に入るためにイエス様を信じる人はイエス様を立ち去らないです。 聖書と違い言う思想と教理をきっぱりと排斥しなければなりません。 患難、逼迫、誘惑が近付いても他のキリスト、他の福音をついて行くとかイエス様を去らないで搖之不動である皆さんにその理由を誰が尋ねたら “永生をくださって天国をくださるイエス様を去って私がどこに行きますか?” と言うように願います。
パウロ使徒は ガラテヤ教会に送る手紙に記録するのを “あなたがたがこんなにも早く、あなたがたをキリストの恵みの内へお招きになったかたから離れて、違った福音に落ちていくことが、わたしには不思議でならない。それは福音というべきものではなく、ただ、ある種の人々があなたがたをかき乱し、キリストの福音を曲げようとしているだけのことである。”（ガラテヤ人への手紙，1:6,7）としました。信者を撹乱させてキリストの福音を歪曲しようとする人々に影響を受けてイエスキリストにあって私たちに永生と天国をくださろうと呼んだ神様を去る人々がいます。 終末の近いほど私たちが大々的な俳道の現象を見るようになるでしょう。 今の時代がそうです。 このような風潮と趨勢に私たちが荒されないで相変わらずイエス様を信じて愛することは非常に神秘な事です。 これは私たちの努力と意志だけでできるのではないからです。 神様の選ぶことと聖霊がつかんでくださる恵みではなければありえない事です。 人が経験する神秘体験の中に一番貴重な神秘体験はイエス様を自分の救い主で信じて迎接する事になったことと相変わらずイエス様を信じて愛するのです。

聖徒の皆さんはこんな神秘体験をしているという事実を非常に重大に思ってこれによる神霊な喜びと感激を享受しながら生きて行くように願いします。